

果樹試験場うめ研究所成果発表課題 要約

1. 「露茜」の片側一文字仕立てについて

(うめ研究所 研究員 向日春輔)

「露茜」の安定生産や作業性向上を目的に、主幹を一定の高さで水平に誘引し、苗木を育成する「片側一文字仕立て」を開発した。コンパクトな樹形のため植栽本数を増やすことにより、10a 当たり累積収量は従来の仕立て方である主幹形に比べて6年生までも多く推移した。剪定時間は主幹形より短くなり、収穫効率は主幹形と同等以上となった。

2. かん水量の違いが「南高」の果実肥大に及ぼす影響

(うめ研究所 研究員 金丸丈能)

ウメは、果実肥大期の水分ストレスにより果実肥大が抑制され、収量低下につながる。そこで、樹体が水分ストレスを受けず、収量が維持できる適切なかん水量を明らかにするため、ハウス内に植栽した「南高」に異なる量のかん水処理を行った結果、20mm 以上のかん水で果実肥大が促進されることが明らかとなった。

3. モモヒメヨコバイの発生生態と防除対策について

(うめ研究所 研究員 裏垣翔野)

近年、ウメ産地で葉への吸汁被害が問題となっているモモヒメヨコバイの発生生態を調査したところ、葉の寄生幼虫が増加した後に被害程度が高まる傾向があった。本種の登録薬剤4剤のほ場での防除効果を検討した結果、いずれも処理7日後までは高い効果があったが、処理14日以降は効果の低下が認められた。このことから被害の抑制には寄生幼虫が増加する前の薬剤処理が有効であり、薬剤処理後2週間程度が経過すると薬剤の防除効果が低下するので発生状況に注意が必要である。

4. 授粉用品種の開花予測プログラムの開発および暖冬がウメの開花期、萌芽期および収穫期に及ぼす影響

(うめ研究所 副主査研究員 柏本知晟)

授粉用品種の「小粒南高」、「NK14」、「白王」の開花始めおよび満開期を予測するプログラムを新たに開発した。暖冬により多くのウメ品種で開花期および収穫期が前進することが明らかとなった。一方で、開花期については台湾ウメで暖冬の影響は小さかった。また、萌芽期や満開期から収穫期までの積算温度については暖冬年と平年で差が小さかった。

5. 施肥量の異なる「南高」への開花前の高温が花器に及ぼす影響

(うめ研究所 研究員 綱木海成)

窒素施肥量の異なるウメ「南高」樹体を開花前に高温条件下におき、落葉後から開花期までの3つの加温期間（長期、短期、無加温）および樹体栄養が花器に与える影響を調査したところ、いずれの加温処理においても減肥区では花数が減少する傾向がみられた。このことから暖冬年においても十分な施肥を行うことでウメ生産量の減少を抑えられることが示唆された。

6. 日高地方における「南高」カットバック処理+摘心処理による 低樹高・安定生産への取組について

(日高振興局農林水産振興部 主任 行森啓)

うめ研究所で開発されたカットバック処理+摘心処理による低樹高・安定生産技術は「南高」青梅の効率的な栽培方法として有望な技術であり、令和3年度から現地実証園を設置し、現地試験や処理の講習会を実施し、技術普及に取り組んでいる。